

ESSAY
エッセイ

クラシックは面白い — その6

ゴルトベルク変奏曲は不眠症のお薬？

バッハ (J.S.Bach) はドイツ音楽の象徴のような偉い存在と教えられますね。私もそう教えられました。晩年の 30 年間はライプツィヒの聖トーマス教会に勤務してひたすら教会音楽に身を捧げた聖者、敬虔一筋のクリスチャンというわけです。

ドイツの音楽史家はそのような聖バッハ像を作り上げるのに専念しました。ところがバッハはそんなにコチコチの堅物じゃなかったようです。その昔、東京芸大で教えておられたドイツ人のソプラノのネトケ・レーヴェ先生は、バッハ聖者思想に汚染された日本人の生徒が直立不動の姿勢でバッハを歌うのを聴いてこう言われたそうです。

「まあ、あなた、どうしてそんなにコチコチになってバッハを歌うの？ バッハという人は 20 人も子供を作った人なのよ」

そうです。バッハは聖者どころか、はるかに血の気の多い俗物でした。若い頃は道路で学生たちと大立回りを演じて牢にほうりこまれたのを初めとしてケンカ、口論、領主に対する反逆など生涯の話題にこと欠きません。30 年間もひたすら聖トーマス教会に仕えた聖者という伝説も眉唾です。彼は聖トーマス教会を辞めて、もっと給料の良い職場に移りたいと思って、あちこちに就職依頼の手紙を書いています (花より団子、信仰より給料というわけでした)。また聖トーマス教会では教会のカンタータを書くのが仕事でしたが、まに合わなくなると (あるいは書くのがめんどくさくなると) 旧作の世俗のカンタータの譜面にそっくり教会用の歌詞を当てはめて、新作のような顔をして提出しています。

そうそう、聖トーマス時代の傑作に「コーヒー・カンタータ」というのがあります。コーヒー・マニアの娘と親父さんとのコミックなやりとりが聴きもので、面白おかしい作品です。バッハの作った傑作コミック・オペラと言えましょう。バッハはこれをコーヒー店で学生たちと一緒に上演しました。

《ゴルトベルク変奏曲》はバッハの最晩年の作品で、最も長く最も深遠で難解なクラヴィーアによる変奏曲という評価でした。でも、この曲はカイザーリング伯爵という人が不眠症で困って、“自分が眠りに就く時お抱え楽師のゴルトベルクに奏かせる音楽”としてバッハに注文したものでした。というわけですから、この曲に限っては、アクビをしようとも居眠りしようとも晴れて天下御免なのです。なにしろバッハ先生は不眠症の人がいつかすやすやと眠ってしまうことを意図して書いたものですから。

でも今回はサクスの合奏によってこれをやろうという卓抜な試みです。あるいは皆様は面白くて眠れないかもしれませんね。でもそれはそれでいいじゃありませんか。

執筆/石井 宏 (音楽評論家)

1930 年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004 年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』(新潮社)で山本七平賞を受賞。

ゴルトベルク ヴァリエーションズ 清水靖晃 & サキソフォネッツ

2016 **11/26** (土) 開場 13:30 開演 14:00 サラマンカホール

《プログラム》
J.S. バッハ: ゴルトベルク変奏曲 BWV 988
清水靖晃編曲 (5 サキソフォン、4 コントラバス版)

チケット料金
全席指定 / S席 3,000円 (サラマンカメイト 2,700円)
A席 2,000円 (サラマンカメイト 1,800円)
学生 1,000円 (30歳まで) ※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット
発売中



2015 年 5 月 24 日 東京オペラシティ公演より